研究紀要『エレノア』第3号発刊にあたって

研究紀要『エレノア』編集委員長　松平　功

パンデミックの影響が世界に浸透している最中においても、研究紀要『エレノア』の第3号を発行できることに感謝したい。COIV-19 によって、世界中の大学での教育状況が一変してしまい、遠隔授業実施のためやオンデマンドクラスの準備などで、忙殺される中での研究論文の作成は容易ではなかっただろう。また、緊急事態宣言や活動自粛などの措置によって大学への入構が制限されるなど、教員の研究に支障をきたす要因が多々あったはずである。そのような負の側面を払拭してご寄稿いただいた研究者の皆様に心から敬意を表する次第である。

しかしながら、予想した通り今回のコロナ禍における寄稿数は例年に比べて半減しており、発表できる論文の数は多くない。研究紀要『エレノア』は査読付き論文として厳選されるため、ご寄稿いただいた論文のすべてをご紹介することができないからである。また、寄稿数が少ないとはいえ、忙しい中に時間を割いて熟読して可否を決めていただいた査読者の先生方には頭の下がる思いがする。

さて、今回選ばれた研究成果は、第一に梶田　叡一学長の著した「聖母マリア（御母マルヤ）の物語の日本での受容　―　潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』における聖書物語の受け止め（3）」で、この論文は潜伏キリシタンの伝承である『天地始之事』から、キリシタン達が聖母マリアをどのような理解の上で信仰していたのかを探求しており、潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』に関する論文のシリーズ第三作目になっている。

湯峯　裕教授の論文「コロナ禍に考えること　―　宮沢賢治の宗教性をとおして」は、COIV-19 の影響で人と人とのつながりの必要性や支え合うことの重要性が強まってきたことを踏まえて、宮沢賢治の寄り添うという生き様に焦点を当てて、その背景にある宗教について語る。浄土真宗、日蓮宗、そしてキリスト教という宗教的環境の中から賢治を通して生み出された、短歌、童話、詩などの文学作品の宗教性を洞察する。

次に、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス准教授は「在留ペルー人から見る祭り「奇跡の主」の意義と将来の展望　―第二世代における宗教継承の課題を中心に―」というテーマで論文を提出している。この論文は、これまでに調査されることのなかった在日外国人の宗教文化、特に「奇跡の主」（イエスキリストを指す）の祭りを対象に調査したものである。所謂、デカセギ現象が始まった 90 年代から現在までの祭りの形態、内容、展望の変化などを綴った非常に興味深いものとなっている。

小職の「コロナ禍にある近代社会と宗教の関係性および宗教的コスモポリタニズムの可能性の一考察：ウルリッヒ・ベックのリスク社会論をツールとして」では、グローバル化が招いた現代社会の危機的状況を解説すると共に、宗教のグローバル化から派生した社会的リスクをどのように解決していくべきなのかを考察し、COIV-19 が人々の宗教概念に及ぼす影響を推察している。

最後の論文となるのは、森田美芽プール学院短期大学非常勤講師の著した「聖書の女性たちをどう読むか」である。この論文は、福音派の釈義学における女性観の見直しの必要性を訴える内容である。所謂フェミニズム神学であるが、フェミニズムという言葉を間違って理解して女性至上主義のように受け取っている方々が多いのは非常に残念なことである。フェミニズム神学は男女の平等を模索する学問である。男女の平等について、近年では誰もが当たり前のように思っているようだが、殆どの女性は平等とは言い難い現実を感じているはずである。理想と現実を近づけるためにはどのようにすればよいのだろうか？簡単なことではない。さて、著者は福音派に焦点を当ててはいるが、キリスト教界全ての教役者に再考を与える著作となれば

と願うばかりである。

研究ノートにおいては大土 恵子、加藤 三保の両氏（両氏ともにプール短期大学非常勤講師）が「感染症による緊急事態宣言下の礼拝について」という題名でキリスト教関係施設での統計分析を寄稿してくださった。

以上の研究論文等に加えて、本学でのキリスト教講演会の原稿を掲載させていただく。通常は年に2回のキリスト教講演会開催を基本としているが、前期の講演会は新型コロナウイルス拡散防止の観点から中止になり、後期の講演会でもウイルス感染の収束がなかったため、インターネット配信での講演会になった。一か所に集うことができないという悲しい現実に直面したわけではあるが、配信が2021年3月末まで続けられたこともあり、講演会を何度でもネット上で鑑賞できるという所に大きな利便性を感じたことも事実である。

現代の時代を反映するかのように、COIV-19 関連の研究に偏る傾向にあるのは確かだが、それぞれの教員が、それぞれの分野で幅の広い研究活動を行っていることが分かる。この紀要で示されている研究成果が高い評価を受けることを願い、執筆いただいた方々および査読等で紀要発行のためにご貢献くださった編集委員の先生方に深く感謝の意を表したい。